

おどけ者の歌

—「をこ」の口承説話—

小林 幸夫

(一) 吉四六の歌

もうずいぶん昔のことになるが、おどけ者を論じて、歌が彼らの大切な要件であると述べたことがある。狂歌咄を題材としたのだから、結論がそこへと落ち着くのは当然である。今にして思えば、幼い論文であるが、愛着がないわけではない。そこから私の俗伝「一休」論は始まったのである。ここで再び「おどけ者」の一休を論じることはいが、改めて「おどけ者」について考えてみたい。今はまだ、ぼんやりとして形を得ないが、それは歌について考えをめぐらすことになるだろう。歌とは言っても、しかし、狂歌咄を論ずることになるかも知れない。狂歌咄とは何だろう、と言う問いに行きつくのかも知れない。なんともおぼつかないが、ともかく手探りで始めよう。そこで民間説話をひとつ例にとってみよう。「夏冬一緒」という昔話である。

山の中の男が町へ炭売りに行った。冬のことです。下に布子を着たが、綿入れを汚すと洗濯が厄介だと思ってその上に単衣物ひとものを着て、炭を一俵背負って出かけて行った。町の店で炭を買ってもらったが、店の番頭が、「炭屋さん、俺ん歌あ一つ詠んだから聞いてくりよう」といって、

夏冬が一緒に来たか炭屋さん下に綿入れ上にかたばら

おどけ者の歌

と詠んだ。炭売りはいましく思い、その番頭の顔を見るとめつきで一方の眼がふさがっていた。炭売りも負けん気になって、「そりゃあなかなか面白い歌だ。ところで番頭さん、俺もいま歌あ一つ詠んだから聞いてくりよう」といって

夜昼が一度に来たか番頭さんあいた眼もありあかぬ眼もありと詠んだ。そこで番頭も何も駄目だった。(山梨県西八代郡上九一色村)

関敬吾が狡猾者譚に分類した笑話である。この「おどけ話」は、東北から九州地方まで広く分布して、特に九州地方では、吉四六話、彦八話、あるいは彦市話となり、中国地方では、佐治谷話の中にも含まれる。山出しの炭売りが、思いもよらぬ歌の才で、番頭をやりこめてしまう。これが九州大分では、吉四六さんに結びつけられる。今はその梗概のみを示しておこう。

〈吉四六が夏風邪をひいて綿入れの上に帷子衣かたびらを着て町に出る。呉服屋の片目の番頭が「夏冬が一緒に来たか吉よむさん、上にかたばら下に綿入れ」というと、「夜昼が一度に来たか番頭さん、あいた目もあり眠った目もあり」と返歌。〉

宮崎一枝編『国東半島の昔話』は、この吉四六話を「座頭話」に分類して載せる。座頭の語った話だとすれば、目の見えない己の境涯あはれによそえた悲しい「をこ話」とも言える。歌という言葉の技が、相手を

おどけ者の歌

やりこめる「おどけ者」の頓作として讃えられる。それならばおどけ者の歌の技は、頓作話の中でどんな意味を持っていたのか。そこに歌の課題はある。歌はなぜおどけ者の言葉の技に結びつけられるのか。ともかく今は、狂歌咄が、おどけ者の頓作（歌）に託して語られていた地方のあったことに留意しておこう。

(一) 藤六の歌

おどけ者の頓作と言えば、はるか時代をさかのぼって、藤六に指を折らねばなるまい。それについては、大島建彦氏に懇切な仕事が行われるので、あらためて触れる必要はない。³彼の頓作の才能は、『藤六集』の俳諧歌に、わずかに窺える。しかし、その歌集の歌にさえ、さまざまに異伝がある。それに加えて藤六、すなわち藤原輔相の実伝さえよくわからない。ただ大意即妙の歌に長じたこの才人には、すでに「この者」の像が窺える。『古本説話集』（巻上・第二十五話）や『宇治拾遺物語』（第四十三話）が、その頓作の面目をよく伝えている。

また『袋草紙』が、輔相藤六の歌を記録して、「をこ」の姿をとどめている。これがなかなかおもしろい。昔は牢獄の前に菊を植えていたそう。ある日、藤六が牢の前を通りかかった時、囚人が走り出てきて、藤六を門内に引き入れてこう言った。おまえはすぐれた歌人との評判だ。ついてはこの菊を題にして、一首詠んでみろ。そこで藤六は、即座に次の歌を詠んだ。

人やうゑしおのれやおひしきくのはなしもとにうつるいろのいた
さよ

囚人、この歌に感心して、藤六を免したという。歌によって危機を逃れる、厄難克服譚である。「人や」は「人屋」（牢獄）、「しもと」には、「答」と「霜」、「うつる」には、「打つ」と「移る」、「いたさ」には、「痛さ」と「甚さが」が、それぞれに掛けられている。さらには

「獄・答・打つ」は縁語となる。歌の修辭をかさねて、藤六の頓才を誇っているのである。

ひとり藤六に限らず、歌の才能は、「をこの者」にとつては、欠かせない能力であったようだ。その才能とは、大島氏の言葉を借りれば、「当座の俳諧」ということになろう。頓作の才能で、人の頤おとがいを解くのが、彼らの言葉の技であった。

平安朝の「をこの者」、藤六の興言利口が、はるか時代を隔てて、民間説話のおどけ者の中に伝えられる。彼らの利口の才は、もちろん歌ばかりではないにしても、その頓作は、歌によって示される場合は多い。この理由をどのように理解すればよいか。その問いに答えたのが柳田国男である。彼は『女性と民間伝承』のなかで、「狂歌咄の大多数は、座頭の原作であらう」と述べて、『醒睡笑』の例を引いている。

座頭の、出居にやどをかりて寐ねたるを、うち忘れ、呼びも出さず、つきたる餅のあたかなるを、家内の人ばかりくふ座敷へ、

餅つくとも目にはさやかに見えねども杵の音にぞ驚かれぬる

柳田はこういう餅話のなかに、彼らの利口の才を認めたのである。

この説明は、座頭の持ち歩いた文芸を語って、とてもおもしろい。柳田の説明を認めるならば、前章の吉四六話に同じく、ここでも狂歌咄と座頭は結びつくのである。おそらくは座頭みずからが、おどけの役を引き受けて、その利口の才をして、座をにぎやかにしたのであろう。座頭はみずからおどける役を引き受けたのである。もちろんこれは、中古、藤六の「をこ話」の作者を、座頭だと言いたいのではない。

(三) おどけ禪亨の歌

狂歌咄の多くが座頭の作になる、というのは、なかなかおもしろい推論だとしても、まだまだ検討が必要な点が多い。狂歌咄とはいって

もさまざまにある。たとえばさきほどの藤六の話はどうだろう。危難を歌によって逃れる頓作話ではあるが、歌徳説話ともなっている。狂歌咄は、またその多くが、歌徳説話の形式をとる。頓作にしても、歌の機知によって、窮地を逃れるのである。ありがたい歌の徳ではないか。

おどけ話をひとつ例にとろう。これも大島氏が紹介されている一話である。『吾妻むかし物語』が記録する「おどけ禅亨」の逸話である。諸国修行の桑門禅亨が、牛盗人の疑いをかけられる。牛の持ち主が、「うしろらぬ」という文字を入れて、歌を詠むならば許そう、と言うので、禅亨は、

午未申酉戌はそちへ亥子丑寅ぬさへ卯きな辰巳よ

と、十二支を詠み入れて、窮地を逃れたという。これと同じ話が、西行の逸話として伊勢で書き留められている。『かさね草子』（寛永二十一年筆写）である。あるいはまた江戸の俳諧師紀逸の『雑話抄』（宝暦四年刊）にも、西行のこととして、同じ話が載る。

もうひとつ、連歌師の話を示そう。こちらは『醒睡笑』が記録する宗長の逸話である（推はちがうた・卷之六）。

久我縄手を葦毛馬・鹿毛・河原毛の三匹に荷を負はせて行くに、宗長後や先とあゆまれし。馬追ふ者のいひけるは、「お坊主、何か知り給ひたる」。「歌道に心がくる」由あれば、「その儀ならばこの馬三匹を、おもしろく歌によまれよかし」。

雨ふれば道あしげなる久我縄手日影さらずは末はかはらけ

同じ歌が別の書物には西行に託されて伝えられてもいる（『日待ばなしこまざらえ』）。さきほどの牛盗み話と同類で、こちらは、葦毛馬・鹿毛・河原毛を読み込んだ狂歌である。このようにして、高名な連歌師や歌人に託して、歌の手柄が讃えられたのである。歌の手柄を語る狂歌咄が、都から地方にまで運ばれて、東北の「おどけ禅亨」の話となったのだろう。おそらくは田舎わたらいの連歌師や俳諧師のしわざ

おどけ者の歌

であろう。彼らもまた、歌の手柄を語って、おのが言葉の技を誇ったにちがいない。次の一話は、右の事情を語るものであろう（『醒睡笑』落書・卷之一）。

祇公、周防の山口へ下向ありつれば、

都よりあきなひ宗祇下りけり言の葉召せといはぬばかりに

言の葉、すなわち歌の知識を携えて、諸国を歩いた田舎わたらいの連歌師輩が、かつてはたくさんいたのである。彼らが頓作話を語っては、みずからおどけ者の役割を引き受けたにちがいない。その中には座頭もまじっていたであろう。

（四）曾呂利の歌

おどけ者の頓作を、歌の手柄を語る話と考えて、いくつかその跡を追いかけてみた。そうすると、狂歌咄の西行もまた、おどけ者にひとしいのではないか。少なくとも、そのように考えてみたくなる。少し先を急ぎすぎたようだ。結論は後にまわして、今度は咄の者、曾呂利の言葉の技をふりかえてみよう。彼こそ近世のおどけ者の代表である。その「詞のたくみに花やかなる事」といえば、「目に見えぬ鬼神」の、眼前に現れるがごとく、その弁舌の巧みなこと、「壺中に天地をこめ、瓢簞より駒を出せし術」にも過ぎるという（『曾呂利物語』はしがき）。天地・鬼神をも動かす言葉の技、「軽口」という、言葉に花を咲かせる頓才によって、別乾坤を建立する。それがおどけ者・曾呂利である。その実像となると、まったくつかみかねるが、逸話はいささか残されている。機知にとんだ歌の才が、軽口の所業として、語り伝えられる。たとえばこういう咄がある。秀吉公に相伴した夜のこと。夜食に蕎麦掻きが出された。これは秀吉の好物である。そこで曾呂利ののした一首（『狂歌咄』）。

薄墨につくれる眉のそば顔をよくよく見ればみかどなりけり

おどけ者の歌

今夜もまた蕎麦掻きか、三日続きだよ、と曾呂利はおどけてみせる。そば顔（横顔）に蕎麦を掛け、みかどは、三陵（蕎麦の実は三角形）と三日を通わせる。この咄は、よっぽど人氣があったらしくて、他に多くの狂歌集や咄本に見える。ところが、『多聞院日記』によれば、この歌は細川幽斎の作である。『戲言養氣集』、『昨日は今日の物語』、『新旧狂歌諧聞書』、『古今夷曲集』、いずれも幽斎作としている。しかし、それもまた怪しいものである。幽斎自身が、おどけ者のように、多くの狂歌が彼に託されているのである。

このような例を挙げていくと、「おどけ者の名には、話を吸引する力があるようだ」という指摘も、なるほどと頷けよう。しかし、それが彼らの歌の才と、どう結びつくのか、すぐには答えられない。だが、美濃部重克氏も言われるように、「これは笑話における大きな問題の一つ」にはちがいない。この難題を私はおどけ者の歌に即して考えようとしているのである。

『曾呂利物語』は、「目に見えぬ鬼神」を眼前にさせるがごとき彼の言葉の技を、言葉を尽くして讃える。その修辭は、「目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ」（『古今集』仮名序）という一節を踏まえている。ここにもおどけ者と歌をつなげようとする心持ちがかいま見える。

（五）曾呂利の糞尿譚

しばらく歌から離れてみよう。これもまた曾呂利の話題、それも糞尿譚である（『昨日は今日の物語』）。

関白秀次公の、御咄の衆に、曾呂利と申す者、あまりよく話を仕り候ゆへ、ある時、話につまり候やうにと思し召して、朝のねおきにまだ顔をも洗はず、目をするする、取り乱したるていにてありけるに、「何か話一つ」と仰せられければ、俄につまりて、

夢物語をかり出しけるは、「さてもこよひ、夢を見て御座候が、ある所へ行き候へば、道に黄金がおびただしく落ちて御座候ほどに、「さてもうれしき事かな」と存じ、おもふ存分に拾ひ申し、帰る所へ、落としたる主来たりて、「取り返へさん」と追ひかけ候ほどに、汗水になりて、逃げ候へども、すでに追いつきさうに御座候時、あまり迷惑いたし、はこをたれて御座候が、目さめて、かの金をさぐりて見れども、金はあとかたちもなく、はこをしたたかたれてあつた」と申し上げた。

言葉巧みな曾呂利をひとつ困らせてやろう、という悪だくみである。寝起きを襲って、何か話を、とせがんでみた。急を襲われて、言葉につまる曾呂利。そこで語った夢物語が、この糞尿譚である。なるほどここには、頓作の歌はない。しかし、俄のこととて、即座に語った話にも「軽口」の才覚がある。機転のはたらきがある。それこそ、「曾呂利といひけるおどけ者」の、「よろずの言葉に花を作意の軽口は、あまねく世にひろまり」（『鹿の巻筆』）と讃えられる、巧みな言葉の技である。そのことは、昔話と較べてみれば、はっきりする。曾呂利話と同じ糞尿譚である。

貧乏な人が、なんとかしてお金ほしいと、そんなふうにして、そして神さんさ願かけたのかなあ。百日の願ちゅうやつよく出てくんです。百日、丑の時参りしたちゅうなことね。そういうことに出てきて、そして後、働きに行つて、たまたま野原でそれが、チャリンチャリンちゅう音がするので、もうまがつてみたら、自分がありやつてやったと。黄金になつてやったと。そしてね、そいつを集めてきたらね、途中で元に戻つてやつたちゅうことだにやあ。きたねえ話。

いわゆる「とりの話」で、下がった話である。これは宮城県登米郡の永浦誠喜翁の語り。稲田浩二氏の「とりの話」（『昔話の時代』所収）に収録される。前と同じ糞尿譚であるにしても、こちらは、語

り手も認めるように、「きたねえ話」である。一方、曾呂利の話には、「軽口」の可笑しみがある。お世辞にも上品とは言えないが、曾呂利の頓才には笑いを誘われる。彼の機転に舌を巻いて、腹を抱えた人々の顔が想像できる。

以上のことからすれば、おどけ者とは、人を笑わせる「をこの者」にちがいない。彼の言葉の技は、即座の「軽口」となってあらわれる。そして、機転の利いた頓作は、歌の才によって發揮される。曾呂利の糞尿譚には、歌こそないが、機転の利いた「軽口」を讀める点で、明らかに「きたねえ」昔話とは異なる。

それでは「軽口」とは何だろう。ここでは軽口の作意を得意とした談林俳諧の、俳諧用語を用いて説明しておこう。俳諧師西鶴が、「則座の興を催し髭おとも和らげるは此の道なれば、数寄にはかはる軽口の句作」(『生玉万句』)と述べるように、それは即興性と当座性を生命とする、当座の俳諧である。「髭おとも和らげる」滑稽な言葉の技が、軽口の生命である。おどけ者の歌の才も、もちろんその一つに数えられる。

(一六) 藤太の糞尿譚

おどけ者の話は、愚かな「をこ話」でもある。ここにもう一つ糞尿譚を示して、その例としよう。福岡県鞍手郡宮田町に伝わる昔話である(『筑豊のむかしばなし』)。

宮田に藤六どんちう、たいそう凝り性ん百姓がおったげな。ある日んこつ山に柴ば刈りに行って戻りがけ、屁が出そうになったやが、こらえち例の凝り性ば起こし握り屁は大そうくせえちう話じゃが、ほんなこつかのう。よし、ものはためしがかんじん、いっちゃ、やったれーちうて、さっそく尻のすに手ばあてち、こらえちよった屁ば、思い切り「ブー」ちぶっ放し「それ今じゃ」

おどけ者の歌

とばかり握ったげな。

そして、鼻んすに手ば持って行っち、パッとこぶしば開いてにおうたげな。そしち、「ウーム。こりゃ、嗅え、握り屁がくせえちうこたあ、ほんなこつちゃ」ち納得ばしたげなやが、行ってん、行ってん、くさかったげな。そりき「握り屁ちや、ききしにまさる嗅さばい」ち、こんだ感心しいしい家に戻ったげな。そしたらなし、女房が鼻ばくん、くん、させち、藤六どん藤六どん、なんかくそうてたまらんが、あんたすかし屁ばこきなさつろちうたげな。

そりき藤六どんは、いよいよ感心して「なる程、なる程、握り屁ちうもんは、いよいよ聞きしに勝るくさかもんばい」ちうたげな。と、藤六どんの顔ばみちよった女房が、ひよこつと笑いこけだしち「あんた：鼻んすばあたってんない」ち、いうたげな。藤六どんが、鼻んすばあたってみたら、なんと、あんたくせえはずたい。実がついちよった。へへ。

ここに登場する藤六も、その名前からおどけ者である。あの平安朝の藤六の末裔である。おそらくは愚か智の糞尿譚が、藤六に結びつけられて伝えられたのであろう。もちろんその伝承の過程は、類話の比較によって行われるべきだろう。しかし、今はその追跡が目的ではない。しばらくはお伽草子の時代にまでさかのぼって、この「をこ話」の性格を考えてみよう。

『福富草紙』には、「^{ほうしやう}乏少の藤太」という貧乏人が登場する。この男、あろうことか、隣の福富の織部に、放屁の芸を習って、織部の教えのままに、二粒の葉を服し、高貴なるお方の御所に参上し、くだんの放屁芸を披露するが、見事に失敗して、ほうほうの態で我が家に帰った。このお伽草子には、二種類の伝本が存在する。一本は京都妙心寺春浦院に伝わる絵巻二巻。こちらは絵の中に、簡単な詞が見られる。もうひとつは「福富長者物語」と称する絵巻一軸。こちらは絵中の詞

おどけ者の歌

だけでなく、地の文も存在する。室町時代のものと考えられる。前者の絵巻に従って、後者の絵物語が作られたと思われる。物語の成長ということを考えれば、この二つの物語の関係は、とても大切なのだが、今はそれを問わない。後者の草子だけを問題にする。「乏少の藤太」という人物が、恰好の比較の対象になるからである。

さて今出川の中將の御所では、高貴な女房たちもうち揃って、酒・食べ物を用意して、藤太の登場を、いまや遅しと、待ちかまえている。

藤太おなかは痛けれど、食物にこころ入れたる、おかしや、さもしや。あまり腰のひきつり、おなかの痛むにたえずして、出でんとしけるが、取りはづしてさつと散らし侍るは、水はぢきの如し。白洲はさながら山吹の花の散り敷きたるやうにて、井出の屋形もかくやらんとおぼすに、俄に風吹き出でて、御殿も御階も匂ひ満ちて、あさましといふもはかりなし。尻尾をすへて走り逃げんとしけるを、雑色、隨身下り立ちて、答振り立て打ち伏せて、いと黒きまどころ引き上げられてうめくを、烏帽子、髻引き立てて、やうやう御庭を追ひ出す。うちやられし頭より、御かはくだりに血をあへして、立田川の秋にことならず。

放屁の芸を見せようとして、あろうことか糞をひり出した藤太は、打ちすえられて血だらけになる。絵中の詞は、「下手のおならこきめが、かかる狼藉、打てや打てや」、「あらくさやくさや」と書いて、藤太を嘲笑する。藤太のこの滑稽な姿は、笑話の愚か者、あるいは欲ばり爺そのままである。春浦院本から「福富長者物語」が生まれたにしても、この「福富長者物語」は、口承文芸の色合いを濃くしている。このことについて岡見正雄氏はすでに、次のように指摘しておられる。

これ（筆者注「福富長者物語」が元来、口承文芸として既に「笑話」として、隣の欲ばり爺の失敗を強調する傾向―仕方話的なものであったかも知れぬ―にあり、そういう方向にこの物語が成長、或いはむしろ変化してゆく過程において、屢々絵巻や絵草

紙に取りあげられ、書かれたのではないかと想像するのである。絵巻から絵草紙へという方向はまた、口承文芸化への過程とも考えられるのである。その時、藤太は、愚か者・欲ばり爺としての性格を強く持つことになったのである。その結果、この物語は、愉快な「をこ話」の可笑しさを手に入れたと言える。

(七) 山吹糞尿譚

愚か者や欲ばり爺のモチーフを取り入れることによって、「福富長者物語」が、口承文芸化したとしても、それだけではこの作品の面白さの説明としては、十分ではない。笑話化したとはいえ、そこに作者の趣向が、あきらかにはたらいっている。文章の修辭のうちに「見立て」の遊びがそれである。これによって藤太は、よりいっそう「をこ者」の性格を強くしている。次の一文がそれである。

・白洲はさながら山吹の花の散り敷きたるやうにて、井出の屋形もかくやらんとおぼす

・うちやられし頭より、御かはくだりに血をあへして、立田川の秋にことならず。

打擲されて血まみれになった藤太を、紅葉の名所、歌枕「立田川」にたとえること、これは「見立て」である。俗なるものを、雅にたとえること、それは俳諧の遊びである。もう少し具体例を示しておこう。「山吹の花」とあれば、「井出の玉川」は、おのずと連想される。詳しく言うまでもない。これらは、和歌や連歌を経て、俳諧に至る歌語の伝統を持つ、由緒正しい雅語である。さらに加えて、「山吹の花」も「井出の玉川」も、恋の詞の伝統を持つ。かつて論じたので、ふたたびここで述べることはしないが、寄合語の例を示して、簡単に説明しておこう。一条兼良「連珠合璧集」に「山吹」の寄合語が集められている。「山吹トアラバ」とあって、次の語が挙がっている。

花色衣 いはぬ色 とへどこたへず 口なし

これらはいずれも素性法師の歌「山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして」を本歌とする。この歌にまつわる本説があるが、それは省略する。要するに、「山吹」から「口なし」が連想されて、「いはぬ色」あるいは「問へど答へず」などが導き出される。「ものは言はじ」も同じである。このような歌語を用いて、恋の心が表白されるのである。それを「大和言葉」という。これらの寄合語（歌語）が、物語草子のうちに「恋の詞」として用いられ、あわれなる恋の情緒を表現する。

作者は、「山吹の花」のようだ、「井出の屋形」のようだ、「立田川」のようだ、と言って、藤太の糞尿譚をかさねて修飾する。俗を雅に取りなして遊ぶ「見立て」である。その結果「をこ」なる藤太の振る舞いは、さらに滑稽に強調される。そこから大笑いが生まれるのは当然だろう。物語文は次のように続けられて、かさねて彼を物笑いの種とする。

屋中の姿、あら恥づかしや。道すがら目なしどち、軒の雀、遊ぶ童の手さし、指さして笑ふ。

さらに絵中の詞に、「おほちの町よりのぞきて笑ふ。あれを見てはこたれさせな、ねんね」と書き添えられる。立派な道化である。これを「をこの者」という。作者は誰とも知れぬが、欲ばり爺や愚か者をモチーフとして、修辭を尽くして、藤太の「をこ」なる姿を作り上げる。その名も「藤太」と言う、平安朝の「をこの者」藤六の嫡子、正統な末裔である。

もちろん藤太は、歌の才など持ちあわせない。しかし、「をこ」なるわざによって、人を笑わせること、そして嘲笑されることは、いずれもおどけ者の立派な資格である。

おどけ者の歌

(八) 西行の糞尿譚

しばらくは歌を離れて、おどけ者の糞尿譚を追いかけてみた。笑話の主人公、おどけ者の「をこ」なる振る舞いを確かめてみたのである。なるほど彼らは機転の利いた歌の才で、人を笑わせる。とともに愚かしい振る舞いで、物笑いのタネともなるのである。相反するとは言え、同じ硬貨のウラオモテ、決して矛盾はしていない。いわば両性具有の道化である。

このような「をこ」の視点から、笑話の主人公西行を眺めれば、彼はどうのような像を結ぶのだろうか。念頭にあるのは、西行の糞尿譚、いわゆる「とりの話」である。

昔、西行法師という人があったげな。発句が上手やったげな。ある時、旅に修行にお歩きになって、ある峠にさしかからっしゃったところが、便がやりとうなったんで木の株に上がってひると、その便が動き出したげな。それで、

西行はながの修行するけれど、生糞ひったはこれがはじめてと、発句を読まれたげな。ところが柴の葉を負うた亀が、千年万年生きる亀が、駄賃とらずに重荷を負うたはこれがはじめて

いうたげな。亀に負けた西行はある橋を通りかかれたところが、ある女がお尻をからげて豆をときよった。そこへ法師が通りかかれたんで、あわてて着物を下ろそう思うたが間がないんで、箆をお尻にかぶした。西行はあまりおかしかったんで、

西行はながの修行はするけれど、豆に箆はこれがはじめてと、また発句をお作りになった。すると女は、

尻にこしきは豆蒸し、杵があるなら突けや西行とやったんで、また西行は負けたげな。

おどけ者の歌

これは広島県山県郡に伝わる話である（『安芸国昔話集』）。全国的な分布のみられるもの。歌の上手西行が、亀や女に歌い負ける。さらには糞尿譚と艶笑譚で笑わせる。笑われるのは西行である。こんなばかばかしい話が、なぜ西行に託されるのか。その理由を説明するのはたやすくはない。稲田浩二氏によれば、東北の「とりの話」には、西行法師は登場しないと言う。これに対して、西国では、西行が特に、下の話の中で人気があったにすぎないという。それならば、西行に託される理由を尋ねるのは、物好きな話なのだろうか。しかし、彼と結びつけられた結果、「をこ」なる西行像が生まれてきた。その経緯について考えることは、大切な咄の課題、すなわち、口承説話における「をこ」の意味について考えることになりはしないか。

ここに語られる西行は、遁世者西行像とは対極にある。それが生まれてきた理由を尋ねることが、この小文の課題でもあるが、私はそれを、「をこ」の視点から考えてみようとしているのである。おどけ者の要件は、機転の利いた歌にあった。頓作が彼の身上である。そしてそれとは一見相反するばかげた振る舞いも、欠かせない条件である。しかし、西行話の場合、何よりも大切なのは歌の応答であろう。歌争いに敗れて逃げるところに、話のおもしろさはある。糞尿や艶笑のことなど、むしろ後世の付会と思われる。『かさね草紙』の例をもって示そう。

西行修行して山道を踏みまよひけり。年寄りたる人に行きあひたり。「此の道はいかで参るぞ」と問ひければ、山人有とも無とも答へざりければ、

うつせみのもぬけのからに物問へば山路をだにも教へざりけりとありければ、山人「か」と答へたり。西行は不審に思ひて、案じてみたまひければ、鸚鵡返しなり。我をもぬけの殻にしたる心なり。

うつせみにもぬけのからが物問へば山路をだにも教へざりけり

西行あきたたまひけり。ちからなく行きければ、みめ形のよき女にあひけり。かかる深き山道に、美しき女のあること不思議さよと思ひけれども、あまり言葉のかけたさにや、「いづかたへ行くぞ」と問ひたまひければ、言をもいわざりけり。歌よむべきと思われけれども、胸とどろきよむことならざりければ、はじめの歌をくちずさみけり。

うつせみのもぬけのからに物問へば山路をだにも教へざりけりとよみければ、女返し

教ゆるとまことの道はよも行かじ我みてだにも迷ふ心を

とありければ、西行言葉なくして、逃げたまひけるとなり。初めの山人も後の女も、山の神にてありしとなり。

神との歌争いに敗れて逃げ出す、西行逃竄譚である。山人は「か」と答えただけの鸚鵡返し之歌で返答する。「もぬけの殻が尋ねても教えない」と言うのである。次いで女は、「私を見て迷うような浅い道心では、仏道の悟りなどとてもおぼつかない」と言い返す。歌の上手西行が逃げ出すのも当然、彼らはいずれも山の神の化現である。このような例をいくつも挙げて、柳田国男は次のように述べた（『女性と民間伝承』）。歌によって、尊貴の方は発見される。たとえそれがたない歌であっても、五七五の非会話形式でさえあれば、心を動かされた人々は、かつてたくさんいた。歌の形で物言う人を、尊貴の人と認めたのである。神は歌によって、その存在を明らかにする、とも言えよう。歌とは、そういう特別な物言いであると信じた人が、かつてはたくさんいたと柳田は主張するのである。

（九）西行逃竄譚

これに較べると、前の「とりの話」、西行の糞尿譚・艶笑譚は、同じく歌問答の形をとる逃竄譚とはいえ、神との問答ではない。歌の勝

者は、あろうことか糞を背負った亀であり、お尻丸出しの女である。卑俗なことこのうえない。聖と俗。いかにも対極的であるが、この昔話を『かさね草紙』のような、神との歌問答の零落の形と考えていいのだろうか。稲田浩二氏によれば、「とりの話」は、炉辺の話ではないという。

秩序ある炉辺でない、いわば無礼講の、おとなたち同士の気楽な話の場が、この話の温床であつたろう。たとえば、庚申講などの講、酒宴、祭礼のなおらい、木小屋などでの職人の休み時などなどの座談、世間話の中で人気を博したものだろう。それがたまたま炉辺にかかわるのは、キジリにはべった人種一名子、子方、小作、下男、下女といった人々の提供する笑話にまじっていたものであろう。

「とりの話」の露悪的なのは、話の座の性格によると理解してもよからう。それならば、聖から俗への話の零落と考える前に、「とりの話」が、酒宴やなおらいの座の気楽な話である、ということを変更して問い直したい。そういう座で、おもしろおかしい西行の歌問答が話題となる。歌の話題が、宴の座の酒の肴となる。それは何も西行の「とりの話」に限ったことではあるまい。歌の話は、宴とともにある。それが雑談なのである。江戸初期の『月の刈藻集』の例を引こう。これも西行逃竄譚である。

人語云。西行俊成ノモトへ行ケルトキ。頃シモ秋ノスヘナリケルニ。庭前ノクチナシノ木ニ。葉紅葉スギテアルヲ西行トリテ。

口ナシニキバノアルコソフシギナレ

ト申タリケルニ。俊成ナントナク座ヲ立テ。前裁ノ残菊ノ枝ヲヲリテ西行ガヒザニ置テ。

キクノハナトテミミモアラバヤ

西行シラケテニゲ出タリシトナン。カカルコトモノノ道ニ熟シタル即時歟

おどけ者の歌

ここでも西行は逃げ出してしまふ。頓知問答に負けたのである。「口なしに牙がある」とはこれいかに。「菊の花に耳なきがごとし」という具合である。この付合は既に『新撰犬筑波集』に見えている。謎解きのとき言葉遊びの句が、西行と俊成に託されたのである。おそらくは歌を話題とするくつろいだ俳諧の遊びなのだろう。西行が負けるのは俊成ばかりではない。子どもにさえやりこめられて逃げ出してしまふ。『俳諧連歌抄』のよく知られた付合である。

ちこの木にのぼるを見て

西行

さるちごと見しよりはやく木にのぼる

と申せば

小兒

いぬのやうなる法師きたれば

この話は伊勢の地誌類にも記録されている。柳田はこの話に触れて、「よほど上手な連歌師の代作と見えます」と述べている。なるほどこれは連歌宗匠の作らしくて、『醒睡笑』（児の噂・巻之六）には、宗長の作として載る。柳田の論に従えば、これも立派な神童発見譚の類型となる。歌によって優れた子ども才能が発見されるのである。とはい言いがら、やはりこれは座興の俳諧である。このような戯笑の遊びは、くつろいだ宴とともにあったのだろう。卑俗にすぎるとはいえ、亀や女との歌争いに負けて西行の話も、これらの俳諧に類する、宴の座の笑いぐさであった。

むすび

酒宴やなおらいの座で、「とりの話」は、戯笑を誘う俳諧のごとき話題であった。軽口の遊びと言ってもいい。西行はもちろん、糞を背にした亀や、尻を出した女の歌もそれにあたる。前に示した西行の逃竄譚に等しく、亀や女との歌争いに敗れて逃げ出してしまふ。品下つて、いかにも卑俗にすぎるとはいえ、西行をやりこめる頓作、あるい

おどけ者の歌

は軽口として興じられたのであろう。

いっぽう、聖と俗、その性格は相反するとはいえ、『かさね草紙』の歌問答、西行と山人・女との応答は、歌の徳を語る説話でもある。歌の形式で物言う人を、尊貴なる方と認める、歌の形で物言う人を、神の化現と認める。高貴なるものの存在を顕現させる言葉の技、それが歌と考えられたのではないか。言葉を換えれば、そのようにして歌の徳を言挙げしてきたのである。いうならば、狂歌咄は、歌に寄せる心意を物語ってくれる、とも考えられる。

即興の頓作と歌の徳。このふたつは、本来別物ではない。西行の狂歌咄は、聖俗ところをかねて、この歌の性格（頓作と歌徳）を語りついできたと言えよう。聖と俗、立場を異にするとは言え、西行咄に託して、歌の威徳を語り伝えてきたのである。

それはおどけ者の歌についても言える。長い歌の歴史の中で、口承説話の世界は、機転の利いた頓作や歌の徳を、形を変えてさまざまに語り伝えてきたのである。それは、ふだんの物言いとは異なる、歌の威徳を語ることであった。狂歌咄や民間説話のおどけ者の歌は、その一齣を語るものであろう。

従来の文献資料だけに限らず、民間の口承説話を用いて、「歌」の課題を追いかけてみたいと思う。そうすればどのような説話世界が、あらたに見えてくるか。これはその試みのひとつである。もちろん先駆的な仕事として、柳田の『女性と民間伝承』があるが、その後この方面の研究がすすんでいるとは思えない。柳田の切りひらいた領域をなにも出られなかったが、おどけ者の歌から眺めた口承説話の世界、その一齣を追いかけてみたのである。限られた資料を用いての論述でしかなく、説明不足は否めない。いずれ材料を調べてさらに論じてみよう。それは、おどけ者とは何か、という課題に答えることになるにちがいない。

(注)

(1) 拙稿「言葉の力ー狂歌咄とおどけ者ー」(『枯野』第六号)

(2) 関敬吾編『日本昔話集成』(第三部・笑話2)

(3) 大島建彦「藤六の和歌と説話」(『咄の伝承』所収)

(4) 同「おどけ禅亨の逸事」(同書所収)

(5) 美濃部重克「世間話と昔話ー昔話「和尚と小僧」の成立ー」(『中世伝承文学の諸相』所収)

(6) 尾形仿「軽口の俳諧」(『俳諧史論考』所収)

(7) 岡見正雄「御伽草子絵に就いて」(『新修 日本絵巻物全集』十八巻所収)

(8) 拙書『しげる言の葉』(序章「しげる言の葉」)

(9) (10) 稲田浩一「とりの話」(『昔話の時代』所収)

(本学教授)